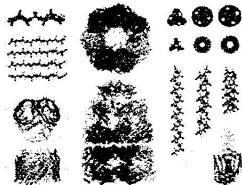


バイオサイエンスのための  
蛋白質科学入門

有坂文雄 著



\*\*\*

バイオサイエンスのための  
蛋白質科学入門

有坂文雄 著

A5判/280ページ

定価 3,360円(税込)

裳華房

ISBN 4-7853-5208-6

本書は、これから蛋白質科学を始めようとする大学生や大学院生にとって、必読・必携の書である。初心者に対しては、蛋白質という複雑で巨大な分子の構造を理解するうえで必須である、非常に基本的な知識と概念をわかりやすく伝えると同時に、蛋白質分子のさまざまな側面を研究する際に必要かつ重要な実験技術を、網羅的にしかもわかりやすく

われの蛋白質に対する現在の理解が、実験技術の進歩と大勢の先駆的研究者の努力によりどのように形成されてきたのかが書かれていて、ともすれば退屈になりがちな序論以降の基礎知識の記述を生々しい学問研究の結果と印象づけ、読者の理解を促進する役割を果たしている。

「前書き」には、著者が東京工業大学で、おそらく長年行なってきた講義“蛋白質科学”の講義ノートをもとに加筆・再構成したものとあるが、本書のわかりやすい内容と書き方は実に著者らしいという感じがして、評者にとっても本書がこういう形で出版されたことはたいへんうれしいことである。著者が学会や研究会で質問や議論をする際によくみかけることだが、対象が何であろうと相手が誰であろうと、基本に立ち返ることによってさまざまな現象や

解説して、すでに蛋白質研究にある程度たずさわっている研究者にとっても、実験や理論研究の幅を広げるために手助けとなるような有用な情報が満載されている。

「蛋白質研究の歴史と現在」と題する序論に始まり、蛋白質を構成するアミノ酸の構造と性質、遺伝子DNAの塩基配列情報から転写、翻訳を経て蛋白質の1次構造が決まる

実験結果のもつ意義をより深く理解するべく、つねに適切な言葉を選んで話そうとする。その真摯な姿勢は科学研究者の誰もが見習うべきものであり、本書にもその姿勢が貫かれている。“入門書”と表題にあるとおり、実験技術にしても重要な概念にしても、必要以上に細かいことは省かれているが、本質的に大切な部分は、驚くべきことにほとんどすべてがしっかりと記述されている。蛋白質科学の研究に長らくたずさわった研究者にとっても、しばらく使わずにいて忘れかけた実験法について思い出すようなときにきつと重宝するであろう。

久しぶりに良い教科書に出会った気分である。うちの大学院生たちにもぜひ読ませたい。

難波啓一

(大阪大学大学院生命機能研究科)

しくみ、立体構造形成の階層的原理、さらなる高次構造形成をつかさどる分子間相互作用、リガンド結合や分子間相互作用の協同性など、蛋白質が分子機械として動作するうえで、またその動作のしくみを理解するうえで、重要なさまざまな要素を順序よくかつ網羅的に解説すると同時に、それぞれの要素を研究する際によく使われる物理化学的な実験計測技術についても、適切な場所に適切な詳細度で記述している。ともすればどちらかに偏りがちな内容をバランスよく組み合わせることにより、全体の流れを崩すことなく、蛋白質科学を学ぶ者にとって必要な知識が着実に得られるよう書かれている。とくに序論に述べられた研究史は、ある程度これを知っている者にとってもワクワクしながら読めるようなエピソードがひもとかれ、われ